



昭和4年に発行された定山溪を紹介するパンフレットの一部（定山溪観光協会提供）

もともとは 湯治場だった

定山溪の地名は、明治四年に開拓使から湯守を命じられた修験僧、美泉定山の名にちなんで付けられました。

明治三十年代の定山溪には旅館が三軒あり、他に御料局、定山溪分担区（営林署の前身）、駅通所（宿と郵便局を兼ねたような施設）がありました。この頃は観光客もまばらで、定山溪を訪れる人のほとんどは湯治（温泉に入って療養すること）が目的でした。

冬になると農家や漁師の老夫婦が湯治のため、息子の馬そりで定山溪へ送ってもらう姿がよく見られたようです。

この頃は、二十一日間の湯治で病気が全快すると言われていたことから、大抵の湯治客は、二十一日間滞在していました。そのため、湯治客は米、鍋、布団などの生活用品を持ってきていました。

雪が深く積もる中、数少ない旅館は湯治客でにぎわい、部屋が狭くなると廊下も部屋にして、湯治客同士が仲良く譲り合っていたそうです。



明治38年頃の定山溪（定山溪観光協会提供）

温泉街が 着々と発展

明治三十年代後半からは、産業の発展や交通手段の発達に伴い、定山溪もその姿を徐々に変えていきました。

明治四十年代前半、定山溪にできた水力発電所が送電を開始し、それまでランプしかなかった温泉地に、電灯がともるようになりました。

大正五年には豊羽鉾山で鉱石の採掘が本格的に始まりました。また、札幌の市街化が進展するにつれ、木材の需要

が高まり、林業も盛んになってきました。

発電所の建設をはじめとした各種産業の発展により、定山溪には多くの労働者が集まり、五軒の商店が軒を連ねました。他にも、寺院や郵便局、巡査駐在所もでき、定山溪の街は次第ににぎわっていきました。

大正七年には白石から定山溪までの区間で定山溪鉄道が営業を開始しました。同区間約三十キロの道のりを、蒸気機関車が二時間十五分かけて運行していました。

この当時、列車の中では、乗客たちが一緒になってお酒を飲んだり、沿線の風景を楽しんだりしながら定山溪に向かっていた。



定山溪を訪れる観光客（大正9年。札幌市文化資料室所蔵）

かつていったようです。鉄道の開通後は、観光客が増加し、旅館も二階建てとなりました。新たに建てられたりしました。その他、飲食店や土産物店も立ち並ぶようになって温泉街が発展し、定山溪は湯治場から観光地へと変化していきました。

昔の定山溪名物は？

大正13年に発行された、定山溪のガイドブック「定山溪仙境」によると『鯉料理がおいしく、マイタケ、シイタケの味や香りが深い』と紹介されています。

他にもフキのかす漬け・みりん漬け、フキ菓子、クルミ餅、炭酸水などが名物や土産物として薦められています。